定年の晩

YAMANAKA TOMOTAKA
山中與隆

短編

Duo-Yamanka

『定年の晩』

中山俊文

目次

『定年の晩』 1

編者あとがき 23

『定年の晩』

中山俊文

男は事務所を出ると、いつものように神田駅に向かった。昨日までは通り道のあれこれについて何も考えずに通り過ぎた街も、なぜか今日は一つ一つが

目に留まる。これが最後に見るこの街だという感慨が男の胸を覆っていた。おそらくもう神田駅から事務所に向かって歩くことはないのだ。

男はこの日定年となり、同僚と最後の挨拶を交わして出てきたところであった。特に急いで歩いたわけでもないが、すぐに駅についてしまったような気がした。最後となる街の風景をしみじみ味わいながら歩いたせいだろうか。

男はやってきた埼京線の大宮行きに乗った。車内は通勤ラッシュが始まる少し前でまだ混んでいなかった。男はドアの近くに立っていたが、何故か涙がこみ上げてくるような気がして、秋葉原で降りてしまった。どこに行く当てもなかったが、ぼんやりと御茶ノ水の古レコード屋に行ってみようかと思って中央線のホームに回った。階段もホームもかなり混雑してきた。電車が、ものすごい勢いでホームに入

ってきたが、急速にスピードを緩めて止まった。ドアが一斉に開くとたくさんの人々が降り、また乗った。

御茶ノ水の古レコード屋は男の行きつけの店である。狭い階段を上がって行くとき、上から降りてくる客と体を壁に擦り付けるようにしてすれ違った。降りてきた客は、今買ったらしい分厚く膨らんだこの店のマークのついたビニール袋を抱えていた。男

もこれまで数え切れないほどあのようにしていそいそとこの店を後にしたものだ。

男は中古 LP のフロアに入った。世の中はすでに CD の時代であるが、まだ LP も豊富に中古としてワンフロアを占めて売られていた。

男は特に欲しいレコードがあるわけでもなく、なんとなくレコードを一枚いちまい繰った。夕もやに煙る山並みの写真がジャケットいっぱいに載ってい

るレコードに男は手を止めた。ワルター指揮のブラームスの交響曲第四番のレコードだ。同じレコードを男は持っているが、しばらくジャケットを眺めているうちに、曲の冒頭の調べが男の心にわきあがってきた。男は、わけのわからないもやもやした今の心境にその音楽も写真もよく合うと思った。不意に狭い通路を無理やり通ろうとする客に体を押されてよろめいた。男の心に響いていた音楽は中断された。

男は店を出て再び中央線に乗り、秋葉原から埼京線に乗り換えた。電車が大宮に近づく頃、外はすっかり暗くなっていたが、はるか西のほうが僅かに明るさを残しており、その濃い茜色のなかにうっすらと富士山が見えていた。男はさっき見たレコードのジャケット写真と似た夕空の色だなと思った。いや、あれよりも相当暗いな、などととりとめもないことを考えているうちに電車は大宮に着いた。

男はサラリーマンの群れに混じって電車を降り、もくもくと階段を上がり、駅前のバス停の列に並んだ。並んでいるのはほとんどが男性で、勤め帰りのように見える。師走にしては特に寒くはなかったが、みんな手をポケットに入れて無口だ。男が毎日見てきた『××駅前』と行き先を表示したバスがやってきた。人の群れは列の前から無言で乗り込んでいく。男も人につかえるようにしながらバスの中に飲み込

まれた。男はあいている一番後ろの席に腰を下ろした。後から来た乗客が男の横に割り込み、男が少し姿勢を動かして、最後部の座席は五人の客で安定した。数人が通路に立った状態でバスは出発した。ここから男が降りる自宅近くのバス停まで約三十分、男はいつもこの時間を居眠りして過ごす。この日もバスが動き出すと条件反射のようにまぶたが下がってきた。

しかしこの日は二、三分で目が覚めてしまった。バスはまだ駅前の混雑した道路から抜け出せずに、信号待ちの列に並んでいる。男は突然立ち上がると、バスの天井に並んでいる赤いランプのついたブザーを押した。ランプが点灯して、『次ぎ止まります』という文字が明るくついた。同時にワンマンの運転手が、

「つぎとまります」

とアナウンスした。他の乗客が男のほうを見た。駅前を出発してすぐ次で降りる男を、忘れ物でもしたのかという目で見る人もいた。あるいは、バスを乗り間違えたように見えたのかもしれない。サラリーマンの通勤時間帯ではあまりそのようなことはおきない。

やっと信号を通り過ぎて大きな通りに出てすぐにバスは道路わきの停留所に止まった。男はバスカー

ドを機械に通してバスから降りた。乗ってくる客はなく、男を下ろすとバスはすぐに発車していった。

暗くなった歩道で、ぼんやり立っている男をよけながら勤めを終えたらしい人々が行きかう中で、男はなんとも言えない寂寥感に胸を締め付けられる思いで立っていた。たくさんの人々がいる街の真ん中で、男は孤独だった。多くのサラリーマンたちと同じように、自分も毎日目標のある人間として朝晩こ

こを通ってきた。もう二十年以上続いた生活パターンだった。それが、男には無くなったのだ。男は今日、転勤を含めて三十五年間の勤めを終えたのだった。

送別会などはすでに何日も前に終わっていて、この日はただ同室の人たちと最後の挨拶を交わして、会社を後にしてきたのだった。

家には妻が一人で男の帰りを待っているはずである。妻は専業主婦で、家は借家住まいである。借家といっても、家賃の半分は会社が払っている、いわゆる借り上げ社宅で、退職に際して、会社からは一ヶ月くらいで家を空けるようにいわれていた。すでに別の借家が見つけてあって、少しずつ片付けも始めていた。

男は家の方角に向かって歩き出した。家に帰り着

いたとき、待っている妻とどんな顔で相対するのかイメージが定まらない。男は、とぼとぼと歩いた。これまでにもこの道を歩いて帰ったことは何度もある。バスがひどく混んでいるときや、バスが出たばかりのときである。歩くときはバス路線ではなく、近道となる路地を通るので、家まで約四キロの道のりだが、これまでは一日の仕事の疲れや、空腹もあって案外遠く感じたものである。しかしこの日は、

あれこれ考える時間が足りないうちに家が近づいてしまった。

「ただいま」

男は玄関を開けると、いつものとおりのつもりで声をかけた。家の中からはテレビの音が聞こえてくる。いつもは奥のほうで妻が夕食の支度をしながら、

「おかえり」

と大きな声で答えるのだが、この日は、急いだ足音

を立てながら玄関に出てきた。妻の足音を聞いた瞬間、男はいつもと違うと感じた。玄関に現れた妻の顔を見ないようにして男は靴を脱いだ。妻は、

「おつかれさま」

と、ややしんみりした声をかけた。そのとき男は胸がいっぱいの状態だったので、きっと表情にそれが表れていると思い、妻が気づかなければいいと思った。男は、声が詰まってしまいそうなので声が出せ

ないでいた。妻はそれを察したのか、
「ご飯出来ているから、」
とだけ言って、先におくへ入っていった。男は自分の部屋でゆっくりと着替えをし、洗面所で手と顔を洗った。いっそのことそこで、出るものなら涙を出し切って、すっきりと顔を洗って居間に行きたかったが、そう都合よく胸のつかえは晴れなかった。
食卓はいつになく品数が多く並んでいた。食卓に

妻の気持ちを読み取った男は、それまでにもまして胸がいっぱいになってしまった。妻も何もいわないところを見ると、同じ気持ちなのかもしれないと、男は思った。食卓についた男の向かい側に、準備を整えた妻も座った。男はぎこちなく、やっとの思いで

「いただきます」

といった。小さな声しか出なかった。妻は、どうぞ

という感じで小さくうなずき、手でもそのようにしぐさをした。男には晩酌の習慣がない。二人は無言で食べ始めた。男は口を動かした弾みで、涙がこぼれ落ちてしまった。何も悲しいわけではなかった。ただ、何かが終わってしまったという感情だけが、男の胸を支配していたのだ。それを見た妻も、箸を置いて下を向いてしまった。下を向いた妻ははらりと自分のひざに涙を落とした。やがて妻は気を取り

直して、男のほうを見た。二人は互いに照れくさそうに笑顔をかわした。しばらく無言で食べ続けたが、男も少しずつ落ち着いてきて、胸のつかえも抜けてきた。しかし食事の間にひとことふたことさして意味のない会話が交わされただけであった。

食事の後男は帰りに立ち寄った店で見たあのブラームスのレコードを聞いてみたくなったが、自室にこもってブラームスの四番を聞くなどあまりにも感

傷的に思えたので、その晩は妻と他愛のないテレビを見て過ごした。

これが男とその妻の、定年の晩の風景であった。

（完）

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

※2 ペンネーム「中山俊文」について

著者、山中與隆は、過去において「小説家になろう」のサイトに「中山俊文」のペンネームで投稿し

ていた時期がありました。また別場所ではその他のペンネームも使用していたようです。一連の作品の出版開始に当たっては、著者名はデータ管理上一つに統一するべきとのことで「山中與隆」に統一しております。しかし、例外として今回続けて出します五つの短編については、過去におけるウェブ上発表の事例がありますので、本の中では著者名を「中山俊文」とさせていただいておりますことをここに記

します。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1　弦楽四重奏団　a

2　弦楽四重奏団　b

3　親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

定年の晩

2022年6月20日　初版発行
著者　山中與隆
編集発行　山中伶子
表紙素材元
illustAC/photoAC/silhouetteAC
タイトル：夜の六本木（六本木ヒルズ周辺）
作者：りっくん_さん
素材のID：23395413
© Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com